発掘調査の概要

藤原宮朝堂院朝庭の調査（飛鳥藤原第153次）

都城発掘調査部飛鳥・藤原地区では、藤原宮朝堂院朝庭の調査をおこなっています。調査は４月から継続しており、６月末の時点で、①朝庭は礫敷きの広場であり排水のための暗渠（あんきょ）が設置されていたこと、②儀式の際の旗竿が立てられていたこと、が明らかになっていました。７月以降は藤原宮の造営過程を明らかにする目的で、礫敷きを部分的に取り外し、下層遺構の調査をおこないました。検出した下層遺構は、運河、斜行溝、南北溝などです。

藤原宮造営時の運河は、幅４m、深さ２mで、長さ７m分を調査しました。運河には、かなりの水量があったことを示す砂が大量に堆積しており、この砂層からは、土器や瓦の他に牛・馬・犬などの骨が多く出土しています。また、運河を埋め立てる際には大量の瓦が捨てられていました（写真左下）。

この運河は、藤原宮造営のための材木や瓦などの資材を運ぶために掘られたと考えられています。『万葉集』の中には藤原宮造営のための木材を近江の田上山（たなかみやま）から宇治川・木津川を通って運んだという歌がありますが、田上山からの木材もこの運河を使って運ばれたのではないでしょうか。

今回の調査ではさらに、運河から枝分かれする溝を新たに検出しました。この溝は、運河から枝分かれして15mほどでぷっつりと途切れてしまいます。運河を通って運ばれてきた資材を陸揚げするための支線の可能性が考えられます。

また、運河や枝分かれする溝を埋めた後に、新たに斜行溝が掘られています。斜行溝は、幅1.8m、深さ0.7mで、調査区の中央で南から北へ流れていたものが北東方向へ曲がります。これは、調査区のすぐ北に位置する大極殿院南門を避けるように掘られており、大極殿院南門の建設が進んでいる段階の溝と考えられます。この他にも、大極殿院南門造営時の排水溝と見られる南北溝を検出しました。

運河埋め立て時に捨てられた大量の瓦

今回の調査を通じて、藤原宮中枢部の造営開始から完成、儀式の場としての利用に至るまでの具体的な過程が分かってきました。

それは、①運河や枝分かれする溝を掘り、造営資材を運び込む、②運河を埋め、大極殿院南門周辺の造成をおこない、斜行溝や南北溝を掘る、③大極殿院南門が完成し、暗渠を備えた礫敷き広場を造る、そして、④藤原宮期に儀式用の旗竿を設置し宮廷儀礼の場として使用する、という各段階です。

藤原宮中枢部の建物建設と周辺の造成工事との関係が遺構変遷の形で明らかになってきたことが、今回の調査の大きな成果です。

なお、９月27日の現地説明会には、約950人もの方々に参加いただき、藤原宮の発掘調査に対する期待の高さを感じることができました。

来年以降も藤原宮朝堂院朝庭の調査を継続していく予定です。今後の調査成果に大いにご期待下さい！

（都城発掘調査部　小田 裕樹）

第153次調査区と大極殿、耳成山（南から）